

TOPPING MEMORIAL POND



タッピング・ポンド（写真手前中央）が出来た頃の写真と思われる。現在の経済学館の位置から1号館方面に向かって撮影。

「TOPPING MEMORIAL POND」<sup>i</sup>（以下、タッピング・ポンド）は金沢八景キャンパスのSCC館の西側、経済学館の北側に位置していた。2005（平成17）年2月、工学部新棟の建設工事に伴い、今までのタッピング・ポンドに別れを告げた。（新棟の入口正面に装い新たにタッピング・ポンドができる予定）

タッピング・ポンドは、1962（昭和37）年、本学の教員であったウィラード・タッピングの妻、エヴェリン（同じく本学教員）の寄附金を基に、卒業生等の寄附金を加えて竣工された。

タッピング一家と宮沢賢治

1895（明治28）年、ウィラードの父（ヘンリー）と母（ジェネヴィーブ）は宣教師として来日し、東京中学院（後の東京学院。関東学院の源流の一つ。）に赴任した。その後、1907（明治40）年、タッピング一家は岩手県盛岡に活動の場を移した。盛岡では詩人・童話作家の宮沢賢治<sup>ii</sup>（1896-1933）が「岩手公園」と題した詩<sup>iii</sup>の中でタッピング一家のことを詠んでいる。

- i 写真の「TOPPING MEMORIAL POND」のプレートは現在、学院史資料室で保管している。
- ii 宮沢賢治は盛岡高等農林学校1年の時、同級生を誘いタッピングが開いていたバイブルクラスを聞きに行った。（「宮沢賢治語彙辞典（東京書籍）」参照）
- iii 盛岡市の岩手公園内に詩碑がある。



関東学院 校訓

編集後記

関東学院は、2009年に創立125周年を迎えます。この年は、横浜開港150周年の年でもあります。学院の原点は、1884年10月6日、横浜山手に創立された横浜バプテスト神学校で、その創設者はアルバート・A・ベンネット博士です。1879年、ベンネット先生は、奥様とお二人で横浜港に来航されました。あれから百二十年が経った2004年2月に、みなとみらい線が開通しました。そして同年4月に関東学院は、馬車道駅と日本大通り駅の間に位置する、横浜港にも近い、中区太田町にKGU 関内メディアセンターを開設しました。これは学院の一部が、源流である地域に再び戻ったことを意味する重要な出来事です。このセンターは、情報・通信・放送・IT 関連企業で構成される横浜メディア・ビジネスセンター（YMBC）8階フロアにあり、IT 教育や生涯学習講座をはじめ、法科大学院の授業など、多目的に利用されています。横浜は開港当時、日本の表玄関として重要な役割を果たしました。同時期、その中心地に関東学院の前身が生まれ、今ふたたび、同地域に新築された、横浜のメディアとビジネスのシンボルであるYMBC内に、学院のメディアセンターを開設したのです。このことの重要性は、歴史が証明してくれることでしょう。本号では、六浦幼稚園の特集を組んでみましたが、いかがでしたか。今後もこの「ニュース・レター」を通して、学院の歴史資料を後世に遺してゆきたいと願っています。関係各位の一層のご支援とご協力を表心からお願い申し上げます。 学院史資料室長 瀬沼達也

KANTO GAKUIN Archives

関東学院学院史資料室 ニュース・レター 第6号 発行日 2005（平成17）年5月18日

発行人 関東学院 学院長 松本昌子  
編集 関東学院 学院史資料室  
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1  
TEL. 045-786-7049 FAX. 045-786-7862



# 関東学院 学院史資料室 ニュース・レター



学院史資料室写真集 5	1
関東学院六浦幼稚園のおゆみ	2
資料・情報提供のお願い	8
学院史資料の紹介	9
編集後記	10

学院史資料室写真集 5 関東学院幼稚園 1956（昭和31）年 夏

「1956（昭和31）年2月、学院の最西端<sup>①</sup>に待望の専用園舎が完成移転した。当時としては斬新なブロック建築の平屋（4教室、職員室、宿直室等、84.65坪）である。小さいながらプールも設置されていて、幼児も教師たちもわが園舎に落着けた喜びで一杯であった。」（「関東学院百年史」p.982より抜粋）

表紙の写真は専用園舎が完成した年の夏、新しいプールで元気に遊ぶ子どもたちの様子が写されたものである。

専用園舎は横長の建物だったようで、プールの奥に見えるドアが建物入り口、写真には写っていないが、プールから手前に建物が続いており、教室等が配置されていたことが窺える。（右写真参照）



① 現在の金沢八景キャンパス、大学工学本館付属棟の西側（駐車場として使われているあたり）。

# 関東学院六浦幼稚園のあゆみ



## 幼稚園の創立から 1960年代まで

佐々木昭子

### はじめに

「関東学院百年史」が1984(昭和59)年に発行された。当時、編集委員の一人として幼稚園の項を担当、創立当時の記録収集や、思い出の話を聞き取りを基に編集の作業をし終えた時のことが懐かしく思い出される。今回はこの記事を基に「関東学院六浦幼稚園」の創立、草創期～1960年代頃までの歩みをまとめてみた。

### 1 創立までのいきさつ

1948(昭和23)年、終戦後の混乱も次第に治まり、戦時中休園していた幼稚園も次々と再興できるようになった頃である。(1948年神奈川県下の幼稚園は24園)既に学院は旧海軍航空技術廠工員養成所跡(現在の金沢八景キャンパス)を取得、専門学校(後の大学)、中高、商工高校が新しい歩みを踏み出していた。空襲で被災した教職員が六浦の地に居を移し生活していたが、牧師中居京を中心に篤き祈りの中に関東学院教会が生まれた(1946年)。教職員の子弟、教会員の子供たちも相当の数であった。牧師中居京は学院が一貫してキリスト教教育を行っていく為には、幼稚園の必要性を強く感じた。また、当時は近隣に幼稚園が無かったので、時代の要求に応じ将来に理想をもって関東学院教会幼稚園設立に踏み切った。

幼稚園開園といってもその為の新築が出来るような時代ではなく、とりあえず校内の浴場(工員養成所の浴場であった処)を代用することとなった。6月開園までの諸手続き、諸準備等、すべて乏しく不自由な時代の状況の中での業務は並大抵の苦労ではなかったが中居牧師を助けて石井晴美協力牧師、教会役員、教会婦人会、教会学校教師、坂田学院長、創立当時の保母、これらの人々が協力された。

### 2 創業のころ(1948年～)

1948(昭和23)年6月15日、関東学院教会幼稚園は開園、新しい歩みが始まった。

初代園長中居京、主任保母石井信子(石井晴美夫人)、保母福本美智子(旧姓村岡)、秋場淳子(旧姓真野)、園児46名でスタートした。小さな群れであったが園長を中心に初代の保母たちは総力を挙げ、希望と情熱をもって保育に当たった。園児たちが元気に生活する姿はその父母たちの喜びであり、学院内の人々をも和ませ、平和の時代の到来の喜びを感じたことであつたと思う。創立後すぐ立ち上がった保護者の会はとても協力的であつた。

1949(昭和24)年3月、第1回卒業式を行い、36名の幼児たちが巣立った。この幼児たちを受け入れるべく同年4月から関東学院小学校(現在の関東学院六浦小学校)が誕生したのである。

専用の園舎に落ち着くまでの8年間に学院の諸事情のため3度も引越しをしている。大した物も無かったので引越しも簡単でした(当時の先生談)とはいうものの創業時代のご苦労は察するに余りある。

創業当時の思い出のエピソードを初代の先生で市内在住のお二人(福本、秋場)から伺ったのは「関東学院百年史」編纂の折であつたが、いきいきと語られた当時の思い出を聞いていると、まるで私もそこに一緒にいたような感動と温もりを味わったことが忘れられない。その中から幾つかをお伝えしたい。

- ◇園舎として代用した大きな浴場は保育には理想的とは言えないまでも、幾つにも仕切っているに使用しました。コンクリート壁で窓が高く日差しが悪く、冬は燃料の僅かな当時でしたので寒くて閉口しました。
- ◇専用のトイレが無く近くのトイレを借用していたが、雨が降ると保母が傘をさして幼児を一人ずつ横に抱きかかえて連れていきました。
- ◇初めは専用のオルガンが無く教会のオルガンを運んで一週間幼稚園で使用し、また返すという状態でした。
- ◇保育内容は礼拝によってその日が始まり、遊戯、ゲーム、歌、お話、工作、自然観察等、幼児に適したものを考え、季節に応じて工夫しました。
- ◇当時は校地内にまだ建物が多く、広々とした草原に野草が咲きトンボが飛びかい、子どもたちは思いっ

り自然の中で遊びました。バッタを捕ったり、オタマジャクシを探したり、散り散りになって遊んでいる子どもたちを呼び集めるのが一苦労でした。チリンチリンと鐘を振りながら校地中を廻ると、子どもたちと一緒に大学生も面白がついて来たりして、今思うとのどかな風景でした。

- ◇物資が乏しい中、教材も少なく、ザラ紙に描いた子どもたちの絵をせめてもとリボンで綴じて渡したり、紙芝居等も教師たちが手作りをしたり苦労しましたが、戦後の幼児教育が始まり、心の豊かさを取り戻すことが出来たことは何よりの喜びでした。
- ◇当時は園の卒業生の大部分は、関東学院六浦小学校に進学しました。

1950(昭和25)年、教会幼稚園から財団法人関東学院に移管、名称が関東学院幼稚園となる。更に1951(昭和26)年、学校法人への組織変更認可となり、従って幼稚園も学校法人関東学院幼稚園として基礎が確立した。

### 3 新園舎にて(1950年代)

1956(昭和31)年2月、学院最西端に待望の専用園舎が完成移転した(注:現在は駐車場となっている処)。当時としては斬新なブロック建築の平屋(4教室、職員室、他)である。小さいながらプールも設置されていた。一同、わが園舎に落ち着いた喜びでいっぱいであつた。園庭で園独自の運動会を行うことが出来たのもこの頃からである。

1957(昭和32)年、創立以来の先生方が退職され、下田静恵主任教諭以下3人のスタッフで保育に当たった(1962年3月まで)。以後佐々木昭子が引き継いだ。時代の変遷と共に幼稚園教育への関心も高まり、園の数はこの10年間で県下で15倍にも増えた(1957年度348園)。学校教育法の中に幼稚園が位置づけられ、幼稚園教育要領の実施へと改訂された。(この時から保母の名称が教諭と変わる)



幼稚園庭で運動会を行う 1957(昭和32)年10月18日

### 4 幼児増に伴う拡張の時期(1960年代)

初代園長中居京は1963(昭和38)年3月定年退職し、広井修が第2代園長として就任した。7月には新しいホールで創立15周年記念式典が行われた。この頃から全国的に幼児の就園率が急激に増加し本園でも定員を160名から200名に変更、増築、教師増員という状態が続いた。

急遽1教室を増築して入園希望者を受け入れることが出来たが、この頃は募集受付日には早朝から保護者の方々が並ぶという(1965年度は徹夜組もあった)事態もあり、定員オーバーで毎年何人かは入園を断らなければならない辛さを味わった。今おもうと隔世の感がある。

### ◎創立20周年記念式典

1968(昭和43)年1月、創立20周年記念式典が行われた。20周年を記念して広井修園長のたつでの希望で、当時の関東学院小学校長で芸術家の水船六洲先生デザインによる新園章、新園旗が披露された。

またこの前後の時期に園のホールに長尾己画伯による大きな聖画「主イエス幼子を祝福し給う」の額が掲げられた。この聖画は今でも園児を見守っている。



### ◎キャンパスの中であって(忘れられない体験)

昭和40年代は学園紛争の時でもあった。校地内に在る幼稚園はいやでもその影響を受けざるを得なかった。西門が封鎖となり急遽作った裏の非常門から園児を登降園させたり、ある時、保育中に幼稚園の門前でゲバ学生たちのぶつかりあい



楽しいおべんとうの時間 1958(昭和33)年5月



葉山へ遠足。葉山小学校、葉山学寮の前で。  
中居京園長と園児たち。 1962(昭和37)年5月24日

き、怒声が飛びかい、ついには火炎ビンが園の屋根まで飛んできて、慌てて消火器で消火をし、大急ぎで非常門から園児たちを避難させたことがあった。忘れられない異常体験であった。本部から非常事態の電話が入る度にドキリとすることが屢々であった。

#### ◎幼稚園に洪水押し寄せる

時は少しさかのぼるが(多分1961(昭和36)年秋)夜半に強い台風が来襲(そのころ私はもう一人の教師と園内に居住していた)。余りの激しい風雨に心配でドアを開けてみてびっくり、園庭が一面の水に覆われ廊下にまでヒタヒタと浸水し始めている——更に保育室にも浸水しそう、どうしよう、大急ぎで二人で出来得るかぎり保育室の教材を夢中で上へ上へと積み重ねたが気がつくピアノの足下にも水が迫ってきている、大切なピアノを濡らしては大変と二人で力を合わせてピアノの足を持ち上げ、丈夫な大積木の上に乗せたのである(それも4か所)。どこからあの力が出たのだろう! 後々までも語り種となった。これも忘れられない体験であった。

水が引いた後、保護者の方たちと一緒に床をブ



お月見おだんごづくり 1962(昭和37)年9月



雪だるまと一緒に 1963(昭和38)年3月13日

ラシで清掃して幼児たちを迎えた。(この洪水は当時、西門前にあった川が急増水し溢れて園庭に押し寄せてきたのであった。この後、学院内外の環境は次々と整備され、今は、かつて川があったことなど知る人も少ないと思う。)

#### 目 ざ り

長い歴史の歩みの中には文字通り様々の出来事があり、晴れの日もあれば、嵐の日もある。学院の中で一番小さい幼稚園も例外ではなかった。しかし、どんな時も幼稚園には愛する幼児たちのはち切れんばかりの歓声と笑顔が満ちていた。そして、その時代、時代に奉職した教職員たちは、その今の時を精一杯幼児教育に尽くした。言うまでもなく、教師たちは皆、大の子供好き、毎日の子どもとの生活の中で、幼児たちに添いつつ、共に活動しつつ、その成長を助け導く存在であり続ける。みんなよく研鑽し、励んできた。

園生活は四季折々の自然の中で、たのしい行事をとり込みながら展開されていく。

入園式、散歩、遠足、水遊び、お泊まり会、感謝祭、クリスマス、クッキング、そして日々の友達との



クリスマスページェント 1962(昭和37)年12月

遊び、このような沢山の得がたい経験を経て幼児たちは逞しく成長し、卒業式を迎え巣立っていく。

“穏やかな雰囲気の中であたたかい保育を”創立以来受け継がれてきた幼稚園の姿勢である。その実践の原動力は先ず毎朝の教職員の祈りであると思う。「主に仕えるものとして今日も精一杯歩めますように。事故や怪我から幼児たちをどうぞお守りください。」昔も今も変わらない祈りの連鎖に、退職して久しい私も加えさせて頂いている。

時代と共に、組織、園名、人事、施設等は変遷しても、変わらない建学の精神は確実に受け継がれている。そして幼稚園は益々発展、充実し、近い将来創立60周年を迎えようとしている。心強い



収穫感謝 1961(昭和36)年11月

限りである。

2005年度からは新園長事務取扱として根津美英子主事が責任を負われると伺っている。心から応援申し上げます。教職員皆様のご健康と主にあるお働きをお祈りいたします。

2005年3月記

#### 佐々木昭子 (ささきあきこ)

1957(昭和32)年から1993(平成5)年3月まで関東学院に奉職。  
1957(昭和32)年から1976(昭和51)年3月まで関東学院幼稚園。  
1976(昭和51)年4月から1985(昭和60)年3月まで関東学院野庭幼稚園主事。  
1985(昭和60)年4月から1993(平成5)年3月まで、関東学院女子短期大学  
幼児教育科専任講師、同付属幼稚園主事。



ブランコを囲んで集合写真 撮影日不詳

### 関東学院女子短期大学 付属幼稚園について

中田弘良

1948(昭和23)年6月に設立された関東学院教会幼稚園が1951(昭和26)年2月に学校法人関東学院幼稚園となり30余年の歴史を持った園が、幼児数の激減という社会現象のため経営が困難になり、1981(昭和56)年4月から関東学院女子短期大学付属幼稚園に組織変更し、関東学院女子短期大学(以下、短大)の林淳三学長が園長を兼務し、園児定員200名のところ125名で再出発したのであった。

短大には保育者を養成する幼児教育科があり、学生の教育実習に役立ち、短大の教授と幼稚園の教員の交流と共同研究が可能、経済的援助等の理由があったようである。スタートに当たって先ず問題になったことは、実習園としての設備が整っていなかったことである。それは元々実習園として建てられた園舎ではなかったため、学生のため

の観察室、ミーティング室等は考えられていなかった。そこで視聴覚機材を駆使することになった。3歳児室、4歳児室、5歳児室、ホールの4か所にビデオカメラを設置し、短大4号館5階の大教室で園児の様子を観察出来るようにした。しかし、園児の保育中の時間帯に幼児教育科の「教育実習指導Ⅰ」の科目の設定が困難だったこと、幼稚園の教員からは、監視されているようだとか



いらっしゃいませ〈お店屋さんごっこ〉



広くなった園庭にある丸木小屋

レームが出たりしたので幼稚園の教員の了解をとって録画し、授業中や昼休みに学生に見せるしか利用出来なかった。また初年度からは幼児教育科1年生の見学実習を行うこととし、20名前後を1グループとして16回の見学を実施した。2年目からはキリスト教保育の体験を全員にさせようと、幼児教育科の「教育実習Ⅰ」の観察実習の場として10名1グループで1週間ずつ実習を行った。実習生にとっては、子どもの動きに見るものすべてが珍しく映るらしく、驚きの目で見ながらメモ帳にペンを走らせていた。最初の頃、毎日のように10名の実習生を受け入れた場合、子どもたちにどのような影響を与えるのだろうかかと心配したが、子どもたちの方から話しかけたり、かくれんぼの時など実習生の後ろに隠れたり、実習生を取り囲んで走り回ったりして何の抵抗も感じていない様子だった。むしろ、実習生を指導する教員の方が、四六時中、一挙手一投足を見られているので緊張していたようであった。

実習生は園児の出席調べをしたり、本を読んであげたり、紙芝居をしたり、積極的に園児たちとの触れ合いを持ったり、昼食を共にして箸やスプーンの使い方、食べ方、時間、行儀などこまかな観察をしていたようである。園児が帰ったあと、部屋その他を掃除し、担当教員と質疑応答を行った後、翌日の準備や実習日誌の整理などをして4時に実習が終るのである。

実習生が帰ったあとに毎日のように反省会を開き実習生の受け入れ方、園児との係り方などについて話し合いをした。教員は付属幼稚園になる前から勤務しており、実習生を受け入れるとは想像もしていなかったのが最初は戸惑うことばかりで苦勞の連続であった。

しかし、付属になったことで以前より改良され



園庭の遊具で遊ぶ園児たち

たことがある。それは既述したように、短大の教授陣と幼稚園の教員の交流が持てるようになったことである。幼児教育について双方から意見を出し合ったり、保護者に幼児教育科の教授を招いて保育に関する講演をして頂いたり、バイブルクラスやおりぶ会の部活動にも指導して頂いた。また運動会などは短大のグラウンドを使用し、実習生の活躍も加わり、大々的に行われるようになった。更には、学生の研究の場として、たとえばリズムの発表を園児に観てもらおうなども行ってきた。付属の良さが少しずつ理解されてきたのか、園児数も年々増加して来たのである。

当初の園庭は現在ほどの広さは無く、小学校の建物があったりして、それこそ猫の額のような所で園児たちは遊んでいたのである。その後、園長室、会議室等を3歳児のためにトイレ付の保育室に改造もした。

付属幼稚園としての園長は初代林淳三教授、下田哲教授、小玉敏子教授、朝倉陸夫教授、所澤保孝教授と22年間で5人の方が関った。

2003(平成15)年4月から関東学院女子短期大学の改組により「関東学院六浦幼稚園」と名称変更となり付属幼稚園の使命は終わりとなったのである。今後は「関東学院六浦幼稚園」としてキリスト教保育をもとに子どもたちの健やかな成長の手助けと、保育者を目指す学生の教育の場として益々発展されることを祈るばかりである。

### 中田弘良 (なかたひろよし)

1981(昭和56)年4月から1985(昭和60)年3月、1993(平成5)年4月から1997(平成9)年3月まで、関東学院女子短期大学付属幼稚園主事。  
1984(昭和59)年10月～1996(平成8)年9月まで、関東学院女子短期大学幼児教育科学科長。  
現在、関東学院大学人間環境学部人間発達学科教授。

## 六浦幼稚園略年表

●建物等の名称は当時のまま。  
●記載事項は六浦幼稚園所有資料、関東学院百年史、関東学院大学30年史等に拠る。(表中の備考欄に記載)

年月日	ことごと	備考
1947年4月 (昭和22年)	保育開始	関東学院大学30年史
1948年6月15日 (昭和23年)	旧海軍航空技術廠工員養成所跡(浴場だった所)にて 関東学院教会幼稚園開園(園児46名) 〔6月10日付で幼稚園認可申請書を提出、 7月10日に神奈川県知事内山岩太郎から設置認可を受ける〕	六浦幼稚園資料 関東学院百年史 関東学院大学30年史
1949年1月 (昭和24年)	大学礼拝堂裏(現在の金沢八景キャンパス、大学7号館あたり)に移転 〔その後、旧神高跡(現在の六浦中高体育館あたり)へ移転〕	六浦幼稚園資料 関東学院百年史
1949年3月 (昭和24年)	第一回卒業式を行う(卒業生36名)	六浦幼稚園資料 関東学院百年史
1950年12月26日 (昭和25年)	財団法人関東学院幼稚園となる	六浦幼稚園資料 関東学院百年史 関東学院大学30年史
1951年2月15日 (昭和26年)	学校法人関東学院幼稚園となる	六浦幼稚園資料 関東学院百年史 関東学院大学30年史
1956年2月13日 (昭和31年)	幼稚園舎として独立の建物が完成し移転する (鉄筋ブロック平屋建84.65坪、総工費342万円) (現在の金沢八景キャンパス、大学西門傍)	六浦幼稚園資料 関東学院百年史 関東学院大学30年史
1957年10月18日 (昭和32年)	初めて園独自で運動会を行う(園庭にて)	*
1963年7月 (昭和38年)	創立15周年記念としてホール(40坪、160万円)を増築、 記念式典を行う	六浦幼稚園資料 関東学院百年史 関東学院大学30年史
1965年4月 (昭和40年)	園児増のため一教室増築する	六浦幼稚園資料 関東学院百年史 関東学院大学30年史
1967年4月 (昭和42年)	定員を160名に増やす	六浦幼稚園資料 関東学院百年史 関東学院大学30年史
1968年1月30日 (昭和43年)	創立20周年記念式典を行う 新園章、新園旗ができる(水船六洲先生デザイン)**	六浦幼稚園資料 関東学院百年史
1970年 (昭和45年)	園児増のため更に一教室増築する 定員200名となる	六浦幼稚園資料 関東学院大学30年史
1979年4月 (昭和54年)	六浦小学校東端に新園舎完成、移転 (鉄筋2階1部地下1階、1033.3平方メートル)	六浦幼稚園資料 関東学院百年史 関東学院大学30年史
1980年9月 (昭和55年)	三歳児保育を開始 (にじ組、園児13名)	六浦幼稚園資料 関東学院百年史
1981年4月 (昭和56年)	組織変更により女子短期大学付属幼稚園と名称変更する 〔4月25日に発足記念式典を行う(於:幼稚園ホール)〕	六浦幼稚園資料 関東学院百年史 いんまぬえる No.23
1988年10月1日 (昭和63年)	女子短期大学付属幼稚園創立40周年記念式 (於:女子短大チャペル)	六浦幼稚園資料 関東学院広報
2003年4月 (平成15年)	組織変更により関東学院六浦幼稚園と名称変更する	六浦幼稚園資料 関東学院広報

\* 関東学院百年史には「1956(昭和31)年秋」とあるが、六浦幼稚園所有のアルバムで確認したところ、1956(昭和31)年の運動会は六浦中高の校庭で開催している。  
また、同アルバムには翌年の1957(昭和32)年10月18日に開催された運動会の写真もあり、「於:幼稚園」の記載があったため、今回の年表作成にあたってはこのアルバムの記録を根拠とした。

\*\* この頁の背景の図柄。「ハトとオリブとミドリ」(創世記第8章)がモチーフとなっている。

## 六浦幼稚園長



初代  
中居 京

1948(昭和23)年6月  
1963(昭和38)年3月

関東学院教会牧師  
大学教授兼務



第2代  
広井 修

1963(昭和38)年4月  
1981(昭和56)年3月

1969(昭和44)年3月まで  
総務部長兼務



第3代  
林 淳三

1981(昭和56)年4月  
1988(昭和63)年8月

園長事務取扱  
女子短期大学学長兼務



第4代  
下田 哲

1988(昭和63)年9月  
1992(平成4)年8月

女子短期大学学長兼務



第5代  
小玉敏子

1992(平成4)年9月  
1997(平成9)年3月

女子短期大学学長兼務



第6代  
朝倉陸夫

1997(平成9)年4月  
2001(平成13)年3月

女子短期大学  
幼児教育科長兼務



第7代  
所澤保孝

2001(平成13)年4月  
2005(平成17)年3月

野庭幼稚園長  
大学教授兼務



第8代  
根津美英子

2005(平成17)年4月  
現在

園長事務取扱

## 六浦幼稚園主事

氏名	在職期間	備考
中田弘良	1981(昭和56)年4月～ 1985(昭和60)年3月	女子短期大学 幼児教育科教授兼務
佐々木昭子	1985(昭和60)年4月～ 1993(平成5)年3月	女子短期大学 幼児教育科講師兼務
中田弘良	1993(平成5)年4月～ 1997(平成9)年3月	女子短期大学 幼児教育科長兼務
根津美英子	2001(平成13)年4月～ 現在	

## 資料・情報提供のお願い

学院史資料室は学院に関する資料の収集をしています。

各学校、各部署等で発行されました刊行物は一部、学院史資料室にご寄贈くださいますようお願いいたします。また、各所で作成されたのち、既に保存期間を超えたか、不要になっている過去の書類、機器・備品、写真などにつきましても、情報を提供していただけますようお願いいたします。(瀬沼・菊池・岡崎)

## 学院史資料の紹介

学院宗教主任・経済学部教授 高野 進

### 『関東学院教育の群像』

編集・発行  
学校法人 関東学院 1994(平成6)年

本書は、関東学院創立110周年にあたり、まとめられたものである。75頁の小冊子であるが、珠玉の書である。

本書の「あとがき」には、当時の学院長であった石田昭義先生が、回顧しておられる。

「横浜バプテスト神学校から東京学院を経て、1919(大正8)年に関東学院として発足した教育の精神は、源流において建学の精神を明らかにしていると言える。即ち国と人にと『仕える』人を育てることなのである。建学の精神を推進し、学院の存立の意義を訴えた多くの先達は、時代や環境に対処しながら変わらざる教育の本道を、キリストの教えの中に求めて語っていたのである。

今年、百十周年に当たり多くの先達の中から、六人の方々の言葉を拾遺し、思いを新たにこれからの学院教育の推進の一助とすることを願って編纂した次第である。」

「編集後記」において、編集の責任を担った小職は、次のようにつけ加えた。

「たしかにこの長い歴史の中の二つの前身校、横浜バプテスト神学校と東京学院、そして今日の関東学院のために、生涯を捧げられた多くの方々がおられます。今回のものには、掲載できなかった方々についても、近い将来まとめる機会が与えられ、諸先輩の働きを顕彰できればと願っております。」

お言葉を掲載させていただいた諸先生は生年順で、次のとおりである。

- C・B・テンネー (1871～1936)
- 坂田 祐 (1878～1969)
- 中居 京 (1891～1992)
- 白山源三郎 (1898～1985)
- 柳生直行 (1920～1986)
- 高野利治 (1927～1991)

これまで『関東学院学報』のために、小職は、最初は外国人教師たち、次に日本人の先駆者たちを掘り起こして、その人たちのいわば「評伝」を紹介してきた。この学院のためにまことにすぐれた多くの人たちがおられたことを知り、あとに継ぐ私たちはその責任の重さを痛感させられる。

ちなみにC・B・テンネー博士のA NEW GATE AND ROADWAYのエッセイが、2004(平成16)年に完成した金沢八景キャンパス大学正門前の建物のファサードに掲載されているが、それはここから引用された。その英文は格調が高く、思想も深い。さらに白山源三郎先生の「大学とスポーツ」、「学風を大いに興そう」は、今日になお妥当する。

題辞として記された聖書の言葉が二つある。柳生直行訳による第一コリント書第3章10、11節とヘブル書第12章1、2節である。それはイエス・キリストが土台であるということであり、信仰の大先輩たちに囲まれ、応援をうけていることを告げる。これらもまた、今日の私たちに訴えるものをもつ。

これからの課題は「今回のものには、掲載できなかった方々」にも注目し、学院教育の使命を再確認し、私たち教職員、在校生、保護者、卒業生のアイデンティティの確立に貢献したいものである。

